

2016年度立命館大学校友会 東日本大震災復興支援事業  
— 東北応援ツアーレポート(宮城県コース) —

氏名： 糸田川 廣志 (イトガワ ヒロシ)

卒業年： 1972年

卒業学部： 理工学部土木工学科

2016年11月19～20日の2日間、立命館大学校友会の東日本大震災復興支援事業東北応援ツアー宮城県コースに参加した。

応援先は、第1日目が南三陸町～女川町～松島(泊)、第2日目が松島～塩釜～閑上～ささ圭(手焼き体験)であった。

宮城県応援ツアーは3年ぶりであったが、実感として復旧・復興が加速している感覚は全く持てなかった！

南三陸町は、防災センターの遺稿補強が行われていたが、周辺の盛り土嵩上げはまだ始まったばかりの印象である。2011年3月11日から、既に5年8ヶ月が経過している。

復旧・復興への合意が難しいのかも知れないが、阪神・淡路震災の教訓を現地に活用してほしいと願うばかりである。避難道路を大きくしてほしい！何か目標となる避難先を造ってほしい！それを千年先に伝えてほしい！と思った。

女川町は、比較的進んでいるように感じたが、JR女川駅の裏側はこれからの状態で、まずは海側の整備から進めていた。聞くところでは、街づくりの中心は次世代の若手で、60代以上は口を出すな！50代は手を出すな！と、若い世代が核となって復興街づくり計画ができたようで、土地の提供も比較的円滑のと情報である。防潮堤はないようだ。

この先、町に活気が戻り、人々が戻るには、次世代が納得し、土地が有効に使える事も重要であると同時に、そこへの参加で継承になると感じた。

松島は観光資源である島々が津波を和らげ、景観は破壊された面があるが、津波から島々が守ったとの見方もでき、島々への感謝が感じられる。それでも4mの津波が襲来したので、被害も大きかったようである。

閑上は、本当に一面が平らで穏やかな地域であったと思われるが、8m～10mもの津波到来で地域一帯が消えてしまったかのごとく、何も無い状態となった。

現在、盛り土嵩上げにより新しい街づくりが始まっている。嵩上げ地に、まずは千人の居住から街づくり復興を目指して進み始めており、5年後10年後が楽しみである。

道は広げて、防災を考えた街づくりを進めると聞いた。寛げる街が待ち遠しい！

講話については、自助の意識向上、防災意識の向上を高校教諭の方から拝聴し、今自分が事ある毎に仕事先等で、自助意識の向上を伝えようとしていることに少なからず後押しをもらった。防災意識の向上→自助向上→情報収集向上→ファーストペンギンになり安全避難する！この確信は、今後の話しの中に出てきそうである。

また復興街づくりの閑上地区では、小中一貫校として再生し、幼稚園児から防災意識を高める継続教育をすると聞き、本当に大事なベースを拝聴できたと実感した。

20世紀末に“21世紀は地震の活動期、火山の活動期”と言われ、既に15年以上が経過する中で、4月14日～16日の熊本地震発生、10月21日は鳥取地震と活動期を自覚しなければならぬ事態と感じている。御嶽山、阿蘇山と火山も活動期のような。

震災復興で道路拡幅が避難には大事と感じており、女川駅前の道路は広いが、もっと広くてもよいと感じた。地域事情からは最大限だったかも知れない。

石巻での復興も道路拡幅は思うように進んでいないようで、避難路確保と安全路確保を土木技術者は意識しなければならぬと改めて感じた。技術者倫理として、救援にはインフラが必要と技術者の偽らざる声を発し続けたいと再認識した。

まずは貴重な様々な講話から得た教訓を、技術者人生に組み入れながら、自助向上に邁進していこうと思っている。自分の身は自分で守る！危うきに近寄らず！

帰宅後、その翌朝に福島沖でM7.4の地震と津波が発生した。関東大震災から93年経過、近年では阪神淡路震災、東日本大震災、今年の熊本地震、鳥取地震と日本列島は揺れている。首都圏も浮かれることなく、復興へ資金と労力を注いでもらいたい！